

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	千葉 秀一
所属機関名	獣医学部 獣医学科
職位	講師
在籍年	6 年

教育の責任

獣医学科で獣医生理学、獣医生理学実習、比較動物機能科学、卒業論文などを担当している。学科の専門教育において、主に基礎獣医学分野の教育を担当している。また、国家試験・資格試験対策委員会にて、学内各種試験問題のブラッシュアップを担当し、それとは別に CBT や国家試験対策、成績解析に用いる各種プログラムの開発を行ってきた。

教育の理念

1. 授業という一期一会に集中する。時間は有限で、ぼーっとしているとあっという間に過ぎ去ってしまう。学びのすべての機会を集中して取り組んで欲しい。その大切さを伝えると同時に、学生が授業内容に興味を持ち、集中して取り組めるよう努力する。獣医学の土台となる知識を身に着けるよう学生を導き、学生を通して、苦しむ生き物を助けること、またそのための技術の進歩が促されるよう教育する。
2. 学びを学び、自律的に学ぶ。獣医学科の学生に限らず、すべての人間は一生学び続ける必要がある。職業・家庭を問わず生活に必要な知識・技術を身につけるために、学び方を身に付け、自らの力で自分の道を切り開いて行けるよう導く。
3. 学びを楽しむ。本来新しいことを学ぶことは楽しいことであるはずだが、学生たちの中にはこれまでの経験から、勉強を苦しみ、それを忌避するように条件付けられてしまっているものが多い。これを解きほぐして、学生が、昨日の自分から進歩した自分を認め、楽しさを取り戻し、自らの学びが自らの QOL を向上させるように導く。

教育の方法・方針

1. 発表、グループディスカッションや小テストを組み込むなど、学習したことをアウトプットするように誘導することに配慮している。また、授業資料はガイド付き（重要な部分を穴埋め形式にした）のものを配布している。これらは、認知心理学における検索練習の理論に基づいており、またより学習効果や授業における集中力を高めるためである。
2. 授業資料を 2 種類用意している。1 つ目は投影資料で、図を豊富にし、講義時間内に十分理解できるようにスライド資料を作成している。2 つ目の配布資料では、スライド対になるように文字で説明を書き加えたものである。講義の中では、文字情報は読まないように学生に注意し、集中力が削がれないように配慮している。このように 2 種類の資料を作成することは手間がかかるが、図のみで文字による説明に乏しい配布資料では、後の共用試験の勉強などで使いづらいという学生からの意見を耳にしたためにこの方針をとることにした。また、デュアルコーディング理論にもかなっているものと考えている。

3. 教科書的な説明のみでは理解させることが難しいため、学生自身の体内で起きている現象と対応させたり、比喻を用いた説明をなるべく取り入れたりしている。例えば、中枢神経系の講義の中では、あまり受けた経験のない神経学的検査の説明では実際の骨格筋の動きを想像することは難しいと思われるので、実際の自分の骨格筋の動きなどがイメージしやすいように、自分の身体を動かしたり、学生にとって身近と思われる事項を取り入れたりするよう工夫している。
4. 学業成績が伸び悩んでいる学生対象に、認知心理学に基づいた学習理論を紹介し、1on1で自主学習への取組状況を確認し、個別のアドバイスを提供するなどしている。これまでの学習支援を通じて、成績が伸び悩む学生の多くは、エビデンスに基づかない自己流で取り組んでいるものが多く、一方で特に分散学習のように効果的なものは自分には難しそうと判断して敬遠する経験から、この方針を取り入れた。1on1にて二人三脚で取り組むうちに学習習慣が根付き、「嫌な」勉強がさほど苦でなくなるように心掛けている。

教育の成果

1. 実習科目では発表とレポート作成を課題として課している。獣医生理学実習の授業アンケートでは、「この分野への理解が深まった」に該当するものが、83%であった。また、獣医生理学の評価試験の担当部分では、識別指数がすべて 0.2 以上と適切な評価内容とされる問題で、正答率も 65%~94%となっており、講義内容の理解はかなり良好と思われた。
2. 学生に配布した資料に関して意見を求めたところ、以前配布しているものよりも使いやすそうだとの反応があった。
3. 質問に対して比喻を用いた回答をしたときに、「そういうことだったのか！」という瞬間的に理解が進んだような反応が得られた。
4. 研究室配属が決まった学生を対象にしたものでは、学修アドバイスと定期的な面談を行ったところ、これらを受けた学生の進級が全員無事に決まり、また CBT 本試験も全員合格した。また、習慣づけに成功することで自信がつき、それが学業面にも好影響を与えているという手ごたえが得られた。

今後の目標

1. より興味を引き付けるよう授業内容を工夫したい。そのためにオープンな FD セミナーに参加するなどして、授業方法のストックを現在より増やす。
2. より効果的な学習支援技法を身につける。これまで主に学習理論を紹介や 1on1 によるサポートを行ってきたが、それ以外の方法でより効果的な方法を発見し、また面談技術も向上させる余地があると考え。これら専門分野以外の事柄について、今後も習慣的に切れ目なく自らも学び、その姿勢が学生の手本となるよう続けていく。

根拠資料

小テスト、発表課題およびレポート課題内容に関する資料、授業配布資料、授業アンケート結果、評価試験結果の統計的データ